オーディオ協会監修 音のリファレンスシリーズ

音源制作レポート

照井 和彦 JAS 事務局長

3月15日有楽町東京国際フォーラムで OTOTEN2018 開催に向けて記者発表会を行い、そこで新規制作されたハイレゾ音源「音のリファレンスシリーズ」の活用についてご説明致しました。 ハイレゾオーディオロゴは定義を満たしたオーディオ機器に冠するものとして 2014 年から運用を開始致しましたが「音のリファレンスシリーズ」はこれらハイレゾ対応機器の試聴に好適なハイレゾ音源として企画し、全17曲を新規に録音制作しました。

本レポートは録音制作が行われたビクタースタジオでの収録の様子、録音&サウンドプロデューサー高田 英男氏の音創りや再生チェックポイント(◇印のコメント)、各演奏アーティストの演奏への思い(〇印のコメント)、プロデューサーのコメントなどを一堂にまとめたもので、実際に頒布する音のリファレンスシリーズに付属されるリーフレットの内容を皆さまへ一足早くお披露目するものです。

録音



録音は渋谷区神宮前にあるビクタースタジオで1月19・23日に行われました。

◇ 音のリファレンスシリーズ録音制作への音質基準 ◇

リファレンス音源(基準となる音質)の定義を、各アーティストがスタジオで演奏している生音の音質感を忠実に録音する事とし、更に演奏から伝わる「音楽感動」を、音の魅力として表現する事をテーマとした。アーティストとの音に対するコミュニケーションを大切に、マイキング・マイクプリアンプにて基本的な音色を創るシンプルな録音アプローチである。

録音スタジオ:ビクタースタジオ301、401

録音システム: 192kHz/32bit ダイレクト 2 チェンネル録音 使用 DAW: Pro Tools HD

ドゥオール(藤井 隆史・白水 芳枝)ピアノデュオ

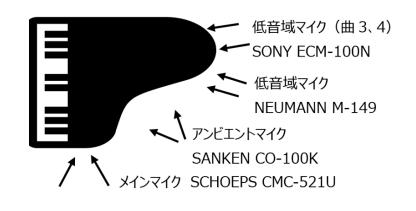
曲1 ブラームス「ハンガリー舞曲1番」

曲2ブラームス「ハンガリー舞曲5番」

曲3 サン・サーンス「動物の謝肉祭より 序曲とライオンの行進」

曲4 サン・サーンス「動物の謝肉祭より 終曲」

◇ 録音機材 ◇
メインマイク
SCHOEPS CMC-521U
低音域マイク
NEUMANN M-149
低音域マイク
SONY ECM-100N
アンビエントマイク
SANKEN CO-100K
マイクプリアンプ
John Hardy M-1



◇ 音創り~再生チェックポイント ◇ 演奏者ドゥオールからピアノサウンドについ て、低音域の迫力・鋭い音の立ち上がり・一音 一音のリアルな解像力とのアドバイス。

ショップスのメインマイクにてクリアーなピアノサウンドを創り、低音域の迫力にノイマン真空管式マイクとソニーハイレゾマイクを低音絃の近接にセットし、音のエッジが鋭く超低音域までクリアーなサウンド創りを進めた。更に、ピアノ全体の響きを三研ハイレゾマイクで調整する。特に動物の謝肉祭については、「裸の王様とライオン」とのキーワードをドゥオールから



頂き、超高域のクリアーサウンドを裸の王様・ライオンの迫力を超低域のイメージにて音創りを 進めた。

極限までリアルなピアノサウンドを求めた録音であり、クリアーで立上りの鋭い音色・低音域のパワー感を解像力が何処まで再生出来るかがポイント。

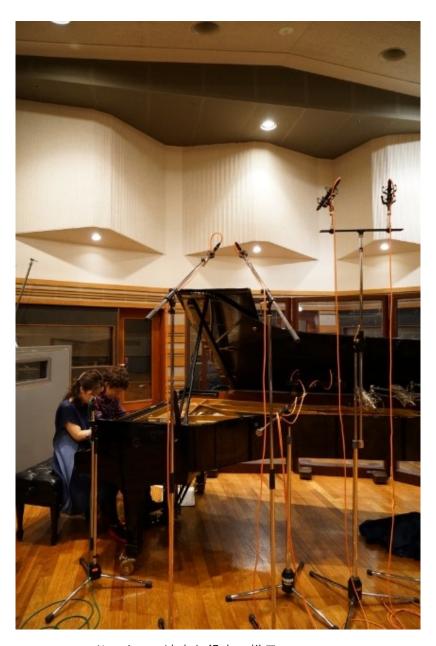
〇 ピアノデュオ ドゥオール 藤井 隆史、白水 芳枝 〇

これまで 6 枚の CD をリリースしてきましたが、今回のように私達の音楽だけのためではなく、素晴らしいマイクやスピーカーからの音を楽しみとされ、私達を聴いたことのない方々にも聴いて頂ける機会、ということで新鮮な気持ちで演奏しました。

レコーディングの間は、音楽に対して丁寧に、謙虚に、そしてしっかりと集中しませた。そしてそれは当日私達を見守って下さったスタッフの皆様全員の空気感にも共通していて、一体となって音楽を削り出せたことに喜びを感じていました。

この音源からは、緊張感と 共に躍動感、音楽の波動まで 感じられます。

ピアノデュオに興味を持って下さるきっかけにもなると思います。素晴らしい音源が完成しましたこと、このご縁に感謝し、音楽と共にある人生を嬉しく思っています。

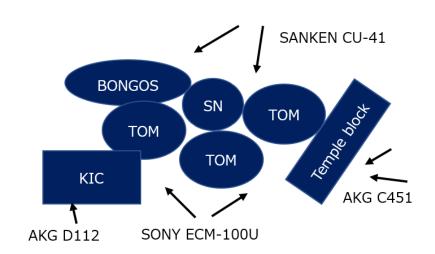


ドゥオール演奏収録中の様子

平子 ひさえ マルチパーカッション

曲 5 カルス「4 つのインヴェンション 3 楽章」

◇ 録音機材 ◇
メインマイク
SANKEN CU-41
シンバル&タム
SONY ECM-100U
ウッドブロック
AKG C451
キック
AKG D112
マイクプリアンプ
Neve 1073
コンプレッサー



TUBE-TECH LCA2B Neve 33609

◇ 音創り~再生チェックポイント ◇ 楽器としてはドラムセットがメインであり、 ドラムブースにセットしマルチマイクの録音に よりタイトでクリアーなサウンドを考えたが、 クラシックパーカッション録音と捉え天井高が 高いスタジオのメインエリアにて演奏して頂く。

打楽器独特の音響空間を生かした響き、打面への強弱による微妙な音のニュアンスなど、打楽器ならではの音の魅力を捉える事をポイントとした。

演奏者の後ろ側から耳の高さより少し高く、 三研メインマイクをセットする。これは演奏者 が感じている各楽器の音色や音量バランスを、 一番素直に録音出来るマイキングの一つで大変 シンプルなマイキング方法である。

シンバル・タムにはクリアーで高音域まで伸びているソニーハイレゾマイクを使用、キックのオンマイクにはダイナミックマイクを使用し、強いアタックを作り、メインマイクのバスドラの低域の響きを上手くミックスする。



マイクプリアンプには音のエッジが鋭く中高域の解像力が高いヴィンテージ機材 NEVE-1073 を音創りの核として使用する。スティックの打面位置で変わるシンバルの音色変化・スネアドラムの強弱における音色感・キック&タムのアタック感など、素直で解像力の高いクラシックパーカッションのサウンドである。

周波数帯域バランス・基本的な音色感・ア タック感の表現など、再生チェックポイント である。



Neve 1073 と使用したイコライザー

○ マルチパーカッション 平子 ひさえ ○

1974年に出版された M.カルス作曲の 4 つのインヴェンションは、全 4 楽章から成る打楽器ソロの名曲ですが、2,4 楽章にのみ伴奏がついており、1,3 楽章は伴奏無しという珍しいスタイルの作品です。国際コンクールなどの課題曲や試験などで取り上げられることも多い作品ですが、今回は多彩な音色を表現できる 3 楽章のバッテリー(マルチパーカッション)部分を演奏させていただきました。サスペンダーシンバルの P で刻む軽快なリズムから始まり、ボンゴ、トムトム、スネアドラム、バスドラム、というピッチの高低差を効かせた膜質打楽器、そしてカウベル、ウッドブロック、テンプルブロックという異質な音色の小物楽器が加わり、幅広く多彩な音色を一度に表現できる作品ですが、その音色の違いを瞬時に出すのがとても難しい。乾いた高音のボンゴから、深く力強い低音のトムの音色を出すには、それぞれを叩く瞬間のスピードや手首や腕のコントロール、そして演奏中の響きやバランスを総合し瞬時に使い分けながら鳴らしていきます。トムトム部分では、2:3, 3:4, 4:5, 4:6, 5:6 という左右の異なるリズムの組み合わせがとても面白く、私自身が"素"になれる部分でもあります。中間部のスネアドラム、そして終盤に差し掛かる前の小物楽器とトムを交えた箇所では、高い集中力と技術が求められる部分で、まさに奏者の聴かせ



福崎 雄也 ヴァイオリン

曲6 バッハ「無伴奏パルティータ3番 プレリュード」

曲7 バッハ「無伴奏ソナタ1番 フーガ」

曲8 クライスラー「愛の喜び」ピアノ:にと まいこ

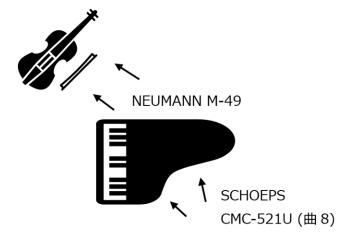
◇ 録音機材 ◇ ヴァイオリン・メインマイク NEUMANN M-49 ピアノ・メインマイク SCHOEPS CMC-521U (曲 8) マイクプリアンプ SSL9000J

◇ 音創り~再生チェックポイント ◇ ヴァイオリンの音色については演奏者が

耳の傍で体感している音色と、客席などホール音響空間を通して伝わる音色とは大きく違い、大変難しいテーマである。

今回の録音では演奏者が体感しているリアルな音色表現を目指す事とした。録音はビクタースタジオ 401 であり、メインエリア独特の響きを生かした録音である。

クラシック録音の定番である最新マイクをトライするが、直接音が鋭く入り過ぎ上手く表現が出来なかった。悩んだ末にヴィンテージマイク・ノイマン M-49(真空管式)をステレオにセットし、ハイブームスタンドで演奏者との距離を追込みながら音創りを進めた。福崎さんからは絃の響きと併せて、楽器本体から





伝わる中低域の音色、更にスタジオ独特の低域の響きの調整など、細部に亘るアドバイスを頂く。 曲8愛の喜びではヴァイオリンに音のフォーカスを合わせ、ピアノは少しバックでヴァイオリンを包み込む音色・バランスとした。

開放的で高域まで素直に伸びた音色、繊細な絃の響きとボディーから伝わる中低域の質感が再生のポイント。

○ ヴァイオリン 福崎 雄也 ○

バッハ「無伴奏ヴァイオリンソナタ第1番からフーガ」について

バッハは鍵盤奏者として有名であったのですが、実はヴァイオリンも相当な腕前だったそうです。その技術の結晶とも言えるのが、バッハの無伴奏ヴァイオリンのための3つのソナタと3つのパルティータだと思います。

この曲は、整然さ・厳格さ・重厚さというのを感じさせます。それは単純な1つのメロディを



淡々と重ねていくフーガという形式もあると思いますが、いろいろな高さで出て来るメロディの高音弦の緊張感のある音や低い弦の深み、そして何よりも重々しく響きわたる和音が数多くあるからでしょう。それ故に音楽自体が重く、流れが止まってしまわない様に意識して演奏しています。

また今回の録音では、ヴァイオリンという楽器が弦の上を弓で「滑って」弾いているのではなく、「擦って」弾いているのだというのがよく伝わってきます。

また、修正無しの一発勝負であったので緊張感、 演奏会本番さながらの迫力も楽しんでいただきた いです。

バッハ「無伴奏ヴァイオリンパルティータ第 3 番からプレリュード」について

この曲はキラキラして軽やか且つ、いろんな表情を魅せる風のようなイメージがあります。「無伴奏ヴァイオリンソナタ第1番 フーガ」とは対極の作品とも言えると思います。

バッハの時代はロマン派以降の時代と違って 強弱記号や表現記号というのは最小限にしかあり ませんでした。ですから、この曲を楽譜の通りに 演奏すると f (強く) と p (弱く) という二つの表 情しかないことになってしまいます。

それをバッハが求めていたというわけではも ちろんなく、演奏家のセンスなどに任せていた部 分が大きいのでしょう。

今回は、フレーズや音楽の緊張度など細かい部

分の音色や強弱を、自分なりに付加して演奏しています。普通の録音ではフラットに聴こえてしまう部分も今回の素晴らしい録音で捉えられたわずかな音色の変化や強弱、風の様な音楽の中のうねりも聴いていただければと思います。

クライスラー「愛の喜び」について

この曲はヴァイオリンの曲の中でも大変有名で、聴いていてとても楽しくなる曲です。今回の録音に関しては、演奏家がいつも悩むところである、作曲者の想い、またどのように弾いて欲しかったのかという意図を、名曲だからこそ、より一層考えました。

実は、作曲者自身の録音が残っている曲でもあります。

作曲家自身の録音があると、その意図を探る上では有難いことではあるのですが、真似をしただけではただの劣化コピーになってしまいます。

僕自身のこの曲へのイメージは、ウィーンの美しく煌びやかな町並みなどから感じる爽やか愛です。ある部分では少し若い二人がふざけ合う様な部分を、ピアノとの掛け合いで表現したり、またあるところは子守歌の様に母親を思わせる深い愛の部分があったりと、短い曲の中に様々な愛が感じられる作品です。

ヴァイオリンの和音の残響や、二人で演奏している空気感、そして弾いている弦それぞれの音色の違いまで感じられる今回の録音はとても演奏家にとっても嬉しいものとなりました。最後になりましたが、今回の録音に関わってくださった全ての皆様に感謝申し上げます。



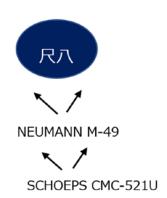
クライスラー「愛の喜び」録音演奏中の様子

熊田 かほり 琵琶 松本 宏平 尺八

曲 9 熊田 かほり「Birth of Legend」

◇ 録音機材 ◇ 琵琶メインマイク
Audio technica AT5040
琵琶アンビエントマイク
SANKEN CO-100K
尺八メインマイク
NEUMANN M-49
尺八アンビエントマイク
SCHOEPS CMC-521U
琵琶マイクプリアンプ
SSL 9000J
尺八マイクプリアンプ
John Hardy M-1





◇ 音創り~再生チェックポイント ◇



変化、録音する側としては究極に難しい録音である。Birth of Legend 楽曲は琵琶と尺八によるコラボ演奏にて音楽ストーリーを表現しており、楽曲の中での繊細な楽器バランスが求められた。 琵琶独特の多彩な音色と鋭いアタック感、尺八の静と動による音色変化など何処までリアルに再生出来るかがポイント。



○ 琵琶 熊田 かほり ○

琵琶の世界観において不可欠な「無常」、「鎮魂」という二つの概念をテーマに、祈りと再生を表現した曲です。何度も廻っては人間を苦しめる業と、それにあらがう人間の哀しさを、ぶつかりあう琵琶と尺八の生々しい音色から感じ取っていただければ幸いです。 この曲は、2008 年の初演から松本 宏平氏とのデュオで公演回数を重ねてきましたが、 作曲から約 10 年の時を経て、このたび音源化して頂けたことをとても嬉しく思います。

琵琶という楽器は、絹糸で弦が張られており、 その扱いは大変繊細で神経を使うところでもあり ます。絹糸なので糸のへたりも早く、調弦が難し

い楽器でもあります。今回は琵琶の様々な音色を楽しんでいただけるような糸の擦れや、バチの 当たる音など、様々な音の魅力を余すところなく録音していただきました。

なお今回の収録には、完成から 100 年以上を経たヴィンテージ総桑の琵琶を使用しています。何世代にもわたって、演奏家たちが大切に引き継いできた古き良き音色を、現代でも味わうことのできる音に仕上がっています。



尺八:松本 宏平 使用尺八 小林 一城作 二尺一寸管

松本 宏平 尺八

曲 10 古典本懐「山谷」ダイジェスト 曲 11 古典本懐「雲井獅子」ダイジェスト

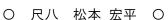
◇ 録音機材 ◇

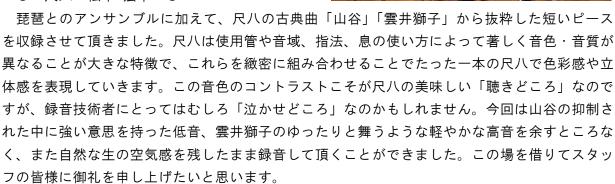
メインマイク NEUMANN M-49 アンビエントマイク SCHOEPS CMC-521U マイクプリアンプ John Hardy M-1

◇ 音創り~再生チェックポイント ◇

尺八独特の音色表現は勿論であるが、演奏者の「気」、音になる前の微妙なブレス感や、呼吸の間など音の無い世界における緊張感が何処まで音として表現出来るかが録音のテーマである。ノイマン M-49 のステレオマイキングにより自然な音色で尺八が持つ基本的な音表情を捉え、ショップス CMC-521 で倍音成分から伝わるブレス感、音の緊張感を表現した。

尺八の静寂感の魅力を音にした録音であり尺 八毎の音色の変化や演奏者の思い「気」が音とし て何処まで伝わるかが再生ポイントである。





使用尺八

「山谷」 横山 勝也作 二尺四寸管 「雲井獅子」 三浦 龍畝作 一尺八寸管

尺八はそれぞれ音域が違います。合奏の時はキーを合わせるため、それに適した楽器を選択します。古典の独奏曲には指定はありませんが、曲の雰囲気に合ったものを選びます。私の所属する流派では雲井獅子は短い竹で高音をくっきり、山谷は長い竹で低音を聞かせる、というのがセオリーです。

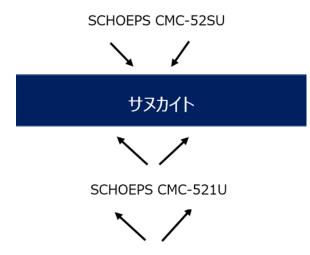


小松 玲子 サヌカイト

曲 12 小松 玲子「秘かな水瓶」

曲 13 小松 玲子「LOVE LETTER」

◇ 録音機材 ◇
メインマイク
SCHOEPS CMC-521U
メインマイク
SCHOEPS CMC-52SU
アンビエントマイク
SANKEN CO-100K
マイクプリアンプ
SSL 9000J



アンドエントマイク SANKEN CO-100K

◇ 音創り~再生チェックポイント ◇

サヌカイト楽器そのものの存在を全く知らない状況で録音する事になり、事前に録音打合せの 時に小松さんにお会いし、楽器について教えて頂いた。

スタジオで聴くサヌカイトは神秘的であり、スタジオ音響空間に立体的な響きを創り出す不思議な音色の楽器であった。柔らかめなマレットでサヌカイトを叩くと、オルゴール的の響きと、自然石が持つ独特の音色が重なり合い、色彩感豊かな響きとなるのである。演奏者側から感じる響きと楽器正面の響き・音色は異なっており不思議な倍音に心地よく包まれる感じである。マイキングは無指向性のショップスマイクを演奏者の後方から、楽器正面には同じくショップスの単一指向性マイクで、全体の響きを三研ハイレゾマイクにて録音。神秘的で大変美しいサヌカイトのサウンド創りを目指した。スタジオのS/Nを良くする為に、録音時にはスタジオの空調を止め、



出来るだけ静寂感 の環境を作り演奏 をお願いした。

柔らかく透明 感がある神秘的響き、 リアルで硬質を色ない。 ルツリーの音色な出 と何処まがポイント。 サヌカイト (日本文化いろは事典より)

香川県瀬戸内地方に産出する自然石、 1891 年ドイツの地質学者ヴァインシェンクが「讃岐の岩」の意をこめ、サヌカイトと命名。木槌で叩くと神秘的で澄んで美しい音が奏でられる。

○ サヌカイト 小松 玲子 ○ 「秘かな水瓶」について

サヌカイトは、1300万年前の自然石からできた楽器です。音色は水のようにとりとしています。「秘かな水瓶」は、まるで静かな深海にいるような気分で、水瓶座の私は孤を楽しみ、秘密を楽しみ、秘密を楽しみ、独り言を言ってるような、内側りがちた曲ですが、石なので固い響きでした。目前がちとした響きのイトにそのまました。目前になりましたが、私が普段はしてくださり、感激致しました。



「LOVE LETTER」について

SNS で気持ちを伝えるスピードの早い時代。好きな人を想いつつ、便箋選びから時間をかける人はもう少ないでしょう。返事が来るのか来ないのか、何度も書き直した LOVE LETTER は、直接的でとても強い行動だと思います。ストレートな気持ちを音にしたためて。サヌカイトの演奏で実感するのは、演奏者と聴く側の意識の違いです。強い思いで演奏する私と、淡い思いで受け取りたいお客様。とても面白い現象だと思います。



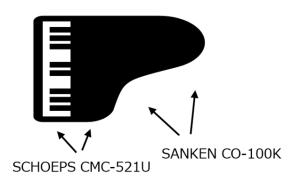
「秘かな水瓶」はピアニシモの柔らかい響きを特徴としますが、この曲はストレートで輪郭のはっきりした曲です。石のアタック音さえも一つの音色として聴いていただきたいです。

サヌカイトの録音の様子。様々なマイクロホンアレン ジを試みて最終的な組み合わせを決めました。

にと まいこ ピアノソロ

曲 14 ドビッシー「月の光」 曲 15 ショパン「エオリアンハープ」

◇ 録音機材 ◇
メインマイク
SANKEN CO-100K
補助マイク
SCHOEPS CMC-521U
マイクプリアンプ
John Hardy M-1



◇ 音創り~再生チェックポイント ◇

美しいピアノソロ演奏である。本来であれば美しく響くホールでの演奏が BEST であるが、録音スタジオでの演奏である為、演奏者の繊細な音表情をリアルに伝える方向での音創りとした。柔らかく繊細な演奏を素直に表現する為には、マルチマイク録音でのトライは難しく、試行錯誤の結果ワンポイント録音でのアプローチとした。100kHz まで録音出来る三研のハイレゾマイクをステレオバーにセットし、全帯域を素直に録音、更にショップスマイクが持つ高域の伸びを少

ワンポイント 録音による自然 で素直なピアノ サウンドが何処 まで表現出来る かがポイント。



センターSANKEN CO-100K

L側 SCHOEPS CMC-521U

○ ピアノ にとまいこ ○

ショパン「エオリアンハープ」について

今回の1曲目の収録曲でした。ピアノへ向かうとなんともソフトなスタインウェイ。どこまで自分の要求に応えてくれるのか…。しかし、ピアノの方も試されているとわかるのか、初めはなかなか心が通い合いませんでした。

スタジオの音響はホールでの響きと異なります。どの位置に耳を置いて演奏すれば良いのかが、 掴めずに手探りの時間を経て、試し録り。

録音を聴いてみると、ここまで繊細にキャッチされているとは、と驚かずには入られませんで した。

それを聴いてからは、私はとにかくやりたいことを丁寧に、ショパンがこの曲に託した感情を 表現すれば良いだけなんだ、と意識を変えました。

高田さんの数回マイクのチェンジを経て、さらに驚くほど理想的な音色バランスに変化しました。

本番収録は、ショパンと親密になれたような幸せな時間でした。

時にため息交じりに、時に熱い口調で語るショパン。しかしその瞬間は刹那的。

あんなにも熱く愛に溢れていた時間が、風のように姿かたちを消してしまい、

残るのは温かな余韻だけ・・・そんな表現をお楽しみいただけたら嬉しいです。

ドビュッシー「月の光」について

ピアノとの距離も縮まった 2 曲目の収録でした。1 曲目の音数の多さとは対極にあるようなこの曲。

たったひとつの音のバランスが全体の流れを変えてしまう。そんな恐怖心があり、途中何度か 録り直しもお願いしてしまいました。

途中休憩の間、私を和ませようとしてくださってるスタッフ皆さんに気がつきました。他愛のない会話をした十分ほどだったと思うのですが、非常にリラックスをさせて頂き、力が抜けたのを覚えています。

作品はそのままの姿で 美しいく、演奏者である 私は、何も加えず何も引 かず・・・

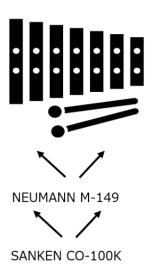
ドビュッシーの世界観に浸ること。音にはない「空間の立体感」も感じ取って頂けたら、嬉しいです。素晴らしいスタッフの皆様と、素晴らいい音源ができました。感謝しています。



平子 ひさえ マリンバ

曲 16 バッハ「無伴奏チェロ組曲 プレリュード」 曲 17 バッハ「無伴奏チェロ組曲 メヌエット」

◇ 録音機材 ◇
メインマイク
NEUMANN M-149
アンビエントマイク
SANKEN CO-100K
マイクプリアンプ
SSL 9000J

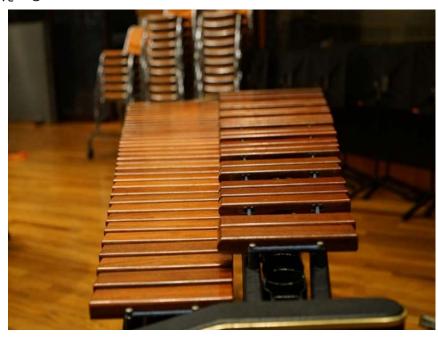


◇ 音創り~再生チェックポイント ◇

平子さんから柔らかい響きの中に深みのあるマリンバサウンドをとのアドバイスを頂く。音の抜けが良く高音域まで伸びるコンデンサーマイクでチャレンジしたが、低域の深みの表現が難しく、最終的にはノイマン真空管式マイクを少し近接にセットし、全体の響きを三研ハイレゾマイクでバランスを調整した。スタジオ録音の為、デジタルリバーブにて余韻感を補強し、平子さんがイメージされたマリンバサウンドを録音した。平子さん演奏の柔らかく深みのある音色感、残響時間の長いホール的な響きの美しさが何処まで再生出来るかがポイント。



〇 マリンバ 平子 ひさえ 〇



ンバの柔らかくあたたかい音色の中にも深さや力強さなど、音色の幅広さを曲の中に感じていただけたら幸いです。





2013年から本格的に市場開発が始まったハイレゾリューション・オーディオ(以下、ハイレゾ)は、ホーム用途からポータブル用途まで幅広いオーディオ商品が発売されてきました。

2015年にはハイレゾ対応スマートフォンの台頭と、それら環境を支援する各種配信サービスが普及し、2017年のコンテンツ市場は数量前年比43%増、金額前年比16%増と成長し続けいています。(GFKデータ)音楽ジャンルも邦楽、洋楽、アニメ、ゲームなど様々なコンテンツが発売され、より幅広い顧客層へ拡大しています。

しかし、ハイレゾ音源として発売されているものの中には、16bit 音源を信号処理でハイレゾ化したものや、アナログからのリマスタリング段階で音質加工したもの、また、レコーディングマイクの帯域制限から、きめ細かい音質と幅広い音域を収録出来なかったものなどが混在しており、収録から完成までハイレゾ規格に準拠し制作されたものはまだ少ないのが現状です。

今回の「音のリファレンスシリーズ」では、アーティストが伝えたい音や表現を余すところなく再現するため、収録機材を厳選すると同時に、アーティストと共に音質、音楽表現の双方に満足いくマイクセッティングを慎重に行い、制作過程での信号処理を極力排することで、緻密で臨場感ある高品位な音源となるよう制作しました。またアーティストの方には、編集をしない前提での演奏を要請し、音楽性を損なわないよう留意しました。

圧縮音源をストリーミングで聴くスタイルが広く普及する一方、データ容量の大きなハイレゾ 音源も、技術の進化や情報インフラ整備を受け多面的な普及が始まりつつあります。

こうした中、今回の音源が幅広いお客様に対し、より高品位なオーディオ体験を提供すると同時に、評価音源としてご活用いただければ幸いです。

「音のリファレンスシリーズ」プロデューサー 竹村 昌樹

ソニービデオ&サウンドプロダクツ株式会社

チーフ・ビジネスディベロップメント・ストラテジスト

(エニーミュージック株式会社 代表取締役社長)

◇ 音のリファレンス音源を録音して ◇

録音制作で常に感じる事は、「音の世界」はそれぞれの感性の世界であり何を持ってリファレンスとするのかは、大変難しい事である。録音エンジニアとして心掛けている事は、アーティストの思いを如何に音として表現し、更に録音技術(エンジニア感性)により、少しでもそれぞれの音楽の世界を広



げられたら素晴らしいと思っている。ハイレゾ録音により音楽制作が日常化している今、音質的 魅力の最大ポイントは可聴帯域での音質改善であると感じている。

ハイレゾフォーマットにより可聴帯域内の物理的特性が改善される事で、音色感・歪感が大きく改善され、更に超高域まで再生特性が伸び、分解能の深さが増す相乗効果により、ハイレゾフォーマットの魅力が音として表現出来るのである。

ダイレクト2チャンネル録音ならではの音の鮮度に拘り、マスタリングなど何もしないダイレクト録音そのままの音源である。

是非、リファレンス音源をハイレゾ再生機器は勿論、それ以外の民生機の音質チェックの音源 として活用して頂けましたら幸いである。

録音&サウンドプロデューサー 高田 英男

本企画のオファーを頂いた際に思い描いたのは、お聴きくださる方が高音質に意識を向けながらも、ふと気がつけばその音楽そのものに聞き入ってしまう姿でした。音質と音楽の両立。そのためにまず「対比」というテーマを設定しました。

ピアノはソロだけでなく、一台二人で弾くデュオの演奏も入れ、ダイナミックレンジの違いなど にも耳を傾けていただけるよう考えました。また同じ弦楽器でもヴァイオリンと琵琶の弦の素材 違いや、石の楽器であるサヌカイトと木のマリンバ、複数の打楽器を一曲で使用するなど、随所 に対比できるものを配置しています。

もうひとつのテーマは「調和」です。デュオのハーモニー、ヴァイオリンとピアノの音の重なり、尺八と琵琶の演者の呼吸など、音楽の中で生まれる調和された空気感をも、高音質な録音でお楽しみいただけます。

各演奏者は選曲の段階から参加し、企画に沿った楽曲を提案くださいました。さらに録音への アプローチはエンジニアの高田さんと、音楽との相関をプロデューサーの竹村さんと相談するな ど、作品作りに深く関わり、「音のリファレンスシリーズ」は、演奏者の伝えたい音楽の世界がそ のまま捉えられた稀有な作品となりました。

この音楽データがお聞きくださる方のそばで空気を震わせる時、今まで体験したことのないような、新しい音の「基準」になれば幸いです。そして同時に、この音楽に浸る時間そのものが、皆様にとって幸せなものになることを願っています。

キャスティングプロデューサー・企画構成 渋谷 ゆう子株式会社ノモス 代表取締役

音のリファレンスシリーズはこのレポートにありますように、オーディオを楽しむための音楽作品として制作されています。また、演奏アーティストの皆さんにも、彼等の通常制作アルバムとはコンセプトや録音手法が違うことを説明し、USBでの配布方法をとることなど、十分な理解



を得ることで録音が実現しました。 192kHz32bit PCMで制作が進められ、ハイレゾ音源として完成を目指しましたので、お手元に届けるために、現在 USB への落とし込み(製造)を行っているところです。

すでにアナウンスしておりますように、6月開催予定のOTOTEN2018の会場では、学生の皆さまへの来場記念として毎日 100名の方に USB をプレゼント致します。一般来場の皆さまにはOTOTEN2018初日開始として USB を原価でお分けできるよう算段中で、準備が整い次第順次webに情報をアップしていきますので、どうぞお楽しみに! (JAS)

© P 2018 NOMOS

音のリファレンスシリーズ ~スタッフ~

プロデューサー: 竹村 昌樹 (エニーミュージック株式会社 代表取締役社長)

録音&サウンドプロデユーサー: 高田 英男 (株式会社ミキサーズラボ)

アシスタントエンジニア:川人 俊之 斎田 崇(ビクタースタジオ)

キャスティングプロデューサー・企画構成 渋谷 ゆう子(株式会社ノモス 代表取締役)